

(19)日本国特許庁 (JP)

(12) 特 許 公 報 (B 2)

(11)特許出願公告番号

特公平6-32307

(24) (44)公告日 平成6年(1994)4月27日

(51)Int.Cl.  
H 05 B 33/22

識別記号

序内整理番号

F I

技術表示箇所

Eg. 5,061,569

発明の数1(全11頁)

(21)出願番号 特願昭59-58088

(22)出願日 昭和59年(1984)3月26日

(65)公開番号 特開昭59-194393

(43)公開日 昭和59年(1984)11月5日

(31)優先権主張番号 478938

(32)優先日 1983年3月25日

(33)優先権主張国 米国(US)

(71)出願人 999999999

イーストマン コダツク カンパニー  
アメリカ合衆国 ニューヨーク州 14650  
ロチェスター市 ステート ストリート  
343

(72)発明者 スチーブン・アーランド・パンスリク  
アメリカ合衆国ニューヨーク州14613ロチ  
エスター市ビアーポント・ストリート324

(72)発明者 チャン・ウォン・タン  
アメリカ合衆国ニューヨーク州14626ロチ  
エスター市バーモント・ドライブ197

(74)代理人 弁理士 湯浅 勲三(外3名)

審査官 紀本 孝

(56)参考文献 特開 昭57-51781 (JP, A)

(54)【発明の名称】 改良された電力転換効率をもつ有機エレクトロルミネッセント装置

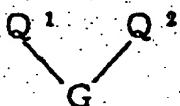
1

【特許請求の範囲】

【請求項1】 順次陽極、正孔インジェクション帯域、有機発光帯域(これらの帯域を合わせた厚さは $1\text{ }\mu\text{m}$ を越えない)、及び陰極からなる少なくとも $9 \times 10^{-3}\text{W/W}$ の電力転換効率をもつエレクトロルミネッセント装置であって、

これらの電極のうち少なくとも一方は $400\text{ nm}$ 以上の波長をもつ輻射線の少なくとも80%を透過させることができ、且つ

前記正孔インジェクション帯域が次の式を有する化合物であり、



2

ここにおいて、Q<sup>1</sup>及びQ<sup>2</sup>は別個に窒素原子及び少なくとも3個の炭素環(それらの少なくとも1個は芳香族のもの)を有する基であり、Gはシクロアルキレン基、アリーレン基、アルキレン基又は炭素-炭素結合からなる連結基である、エレクトロルミネッセント装置。

【発明の詳細な説明】

本発明は、有機化合物を発光手段とする、電気信号に応答して発光するエレクトロルミネッセント装置に関する。

10 有機エレクトロルミネッセント装置がそれらの対抗品と十分に対抗しうるものとなるためには、対抗しうるコストにおいてこれらの電力転換効率が増大することが望ましい。電力転換効率は入力に対する出力の比(通常はW/W)と定義され、装置の駆動電圧の関数である。経済的な駆動回路部品を用いる駆動電圧、すなわち25ボル

3

を越えない電圧に関しては、電力転換効率は無機装置場合  $1 \times 10^{-5} \text{W/W}$  以下に限定されている。  $10^{-5} \text{W/W}$  以上の電力転換効率をもつ、厚いフィルム ( $> 5 \mu\text{m}$ ) または単結晶を用いる有機エレクトロルミネッセンス装置が開発されてはいる。しかしそれらの厚さが比較大きいため、この種の装置を駆動させるのに要する電圧はかなり高い、すなわち  $100$  ボルトまたはそれ以上である。

電圧を  $25$  ボルト以下に低下させるためには薄膜型エレクトロルミネッセンス装置が望ましい。これはここには有効な帯域または層の厚さ、すなわち電極間にある層の厚さが  $1 \mu\text{m}$  を越えない装置を意味する。ピンホールの問題を考えると薄膜の形態を達成することは特に重要であった。ピンホールは電池をショートさせるので避けられない。たとえばドレスナー、RCAレビュ

Vol. 30, 322 ff 頁 (1969年6月)、特326頁を参照されたい。ピンホールの形成を防止するために、被覆用配合物中に結合剤を使用することが好ましくされている。この種の結合剤の例には付加重合体とえばポリスチレン、および縮合重合体とえばポリステルが含まれる。電池のショートは避けられるが、結合剤を使用することは不満足な場合がある。このため溶剤被覆加工法を用いる必要があり、ある層の溶剤下層の溶剤としても作用する可能性があり、これによく間の明瞭な境界設定が妨げられる。結合剤を必要とする1層を溶剤被覆したのち結合剤を必要としない層(1層または多層)を蒸着させる方法は考えられるが、順序すなわち発光層を溶剤被覆する場合、溶剤が下に影響を与えた場合の実用性は照明されていない。

特許第4, 356, 429号明細書に記載された電極、正孔インジェクション帯域 (hole injecting zone) としてポルフィリン系化合物からなる層をもつ本發明との同じ型の装置の一例である。

本特許のセルは先行技術のセルよりも著しい改良を示すが、望まれている電力転換効率、すなわち  $25$  ボルトを越えない駆動電圧を用いた場合に少なくとも  $9 \times 10^{-5} \text{W/W}$  の水準を達成していない。正孔インジェクション層内のポルフィリン系化合物は有色であるため、セラにより放出される光を若干吸収するという望ましくない傾向を示す。またポルフィリン系化合物は有效地に発光るために必要な正孔および電子の有効な発光的再結合を妨げるとと思われる。

発明の目的は、少なくとも 1 衍改良された、すなわち少なくとも  $9 \times 10^{-5} \text{W/W}$  に及び電力転換効率をもつエレクトロルミネッセンス装置(以下 "EL") 装置を提供することである。

発明によれば、順次陽極、正孔インジェクション帯域、有効発光帯域(これらの帯域を合わせた厚さは  $1 \mu\text{m}$  を越えない)、および陰極からなり、これらの電極のうち少なくとも  $400 \text{ nm}$  以上の波長をも

4

つ輻射線の少なくとも  $80\%$  を透過させることができ、かつ

少なくとも  $9 \times 10^{-5} \text{W/W}$  の電力返還効率をもつエレクトロルミネッセンス装置が提供される。

好ましくはこの装置の発光帯域は、i)  $25$  ボルト以下およびii) この装置の最大電力転換効率を与える電圧以下で駆動される試験装置に用いた場合、少なくとも  $5 \times 10^{-4}$  光子/電子のエレクトロルミネッセンス量子効率を与える電子伝達化合物からなる。上記試験装置は1) 本質的に1, 1-ビス(4-ジ-p-トリルアミノフェニル)シクロヘキサンからなる正孔インジェクション帯域(この正孔インジェクション帯域と上記の発光帯域を合わせた厚さは  $1 \mu\text{m}$  を越えない)、2)  $400 \text{ nm}$  以上の波長をもつ輻射線の少なくとも  $80\%$  を透過させる陽極、および3) インジウム製陰極から構成される。

本発明の装置は必要とされる改良された電力転換効率を示す。

本発明の装置において発光帯域または正孔インジェクション帯域はそれぞれ電子伝達化合物からまたは正孔伝達化合物から作成され、これは本発明の実施態様の多くにおいてそれぞれの帯域に結合剤を用いずに行われる。

本発明のさらに他の有利な特色は、正孔インジェクション層用として、発せられた輻射線に対し実質的に透過性である化合物が見出されたことである。

本発明の他の有利な特色は添付の図面を考慮に入れて後記の好ましい実施態様を参照することにより明らかになるであろう。第1図は電源に接続した本発明装置の一部の概略的断面図であり。

第2図は本発明に従って製造された装置に関する電力転換効率対エレクトロルミネッセンス量子効率を示す対数-対数グラフである。

正孔インジェクション物質および発光物質は各帯域内に存在する(この帯域が層であっても他のものであっても)。好ましいエレクトロルミネッセンス装置においてこれらの物質は順次重なった被膜ないしは層中に存在する。

正孔インジェクション層は正孔伝達化合物からなり、一方発光層は電子伝達化合物からなる。

本発明者らは、後記のように駆動および構成されるセルに用いた場合に  $5 \times 10^{-4}$  光子/電子を越える EL 量子効率を与える特定の電子伝達化合物があることを見出した。電力転換効率と EL 量子転換の間には直接的な関係があるので、これらの化合物を用いると前記の駆動電圧に関して電力転換効率は少なくとも  $9 \times 10^{-5} \text{W/W}$  となることが保証される。これらの化合物は容易に薄膜の形態で沈着するので、有効帯域を合わせた厚さが  $1 \mu\text{m}$  を越えない薄膜型装置が容易に得られる。

本発明の装置に用いられる電子伝達化合物は、酸化還元反応において還元される化合物である。本発明において特に有用なものは、前記の試験に関して少なくとも  $5$

## 5

$\times 10^{-4}$  EL量子効率を与える電子伝達化合物である。周知のようにEL量子効率は単純に外部回路で測定される電子/秒に対する、セルから放出される光子/秒の比に等しい。この効率を電力転換効率(W/Wの単位で定義される)と混同してはならない。

電子伝達化合物が少なくとも $5 \times 10^{-4}$ 光子/電子(すなわち0.05%)のEL量子効率を与えるか否かを判定するためには下記の試験を行う。

ELセルは下記の順序で構成される:

400nm以上の波長をもつ輻射線の少なくとも80%を透過させる陽極(たとえばネザトロン(Nesatron、商標)ガラス);本質的に1,1-ビス(4-ジ-p-トリルアミノフェニル)シクロヘキサンからなる正孔インジェクション層;問題の電子伝達化合物の層;およびインジウム製陰極。ここで正孔インジェクション層と発光層は合わせて厚さ1μを越えない。駆動電圧をかけ、最大電子転換効率または25ボルトのいずれかに達するまで(いずれが先に起こるとしても)高める。この電圧において最大EL量子効率を測定する。

表Iには、上記のように構成され、かつ上記の電圧で駆動される装置において試験した場合の若干の有用な電子伝達化合物に関するEL量子効率を示す。これらの例のそれぞれにつき、最大EL量子効率の電圧は25ボルトの制限以下であった。

表 I

構造	最大EL量子効率*	測定点における駆動電力
ネザトロン陽極/エピドリジン <sup>1</sup> (1500Å)/インジウム(In)陰極	$2 \times 10^{-4}$	18V

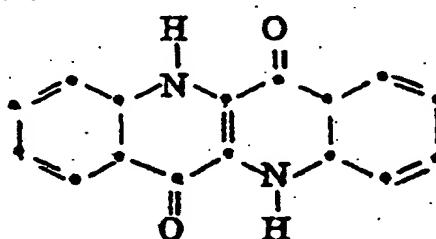
## 6

構造	最大EL量子効率*	測定点における駆動電力
(比較例)		
ネザトロン陽極/HI-1 <sup>2</sup> (75nm)/E1 <sup>3</sup> (75nm)/In陰極	$1 \times 10^{-2}$	20V
ネザトロン陽極/HI-1(75nm)/E2 <sup>4</sup> (75nm)/In陰極	$8 \times 10^{-3}$	20V
ネザトロン陽極/HI-1(75nm)/E3 <sup>5</sup> (75nm)/In陰極	$3 \times 10^{-3}$	15V
ネザトロン陽極/HI-1(75nm)/E4 <sup>6</sup> (75nm)/In陰極	$3 \times 10^{-3}$	12.5V
ネザトロン陽極/HI-1(75nm)/E5 <sup>7</sup> (75nm)/In陰極	$1.5 \times 10^{-3}$	24V
ネザトロン陽極/HI-1(75nm)/E6 <sup>8</sup> (75nm)/In陰極	$5 \times 10^{-3}$	15V
ネザトロン陽極/HI-1(75nm)/E7 <sup>9</sup> (75nm)/In陰極	$8 \times 10^{-3}$	14V

E5を除いて有効数字1個に四捨五入した。

1エピドリジン=

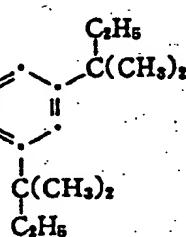
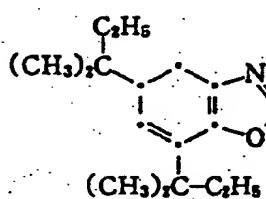
20



2 HI-1 = 1,1-ビス(4-ジ-p-トリルアミノフェニル)シクロヘキサン

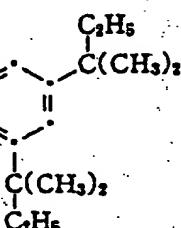
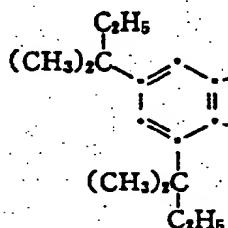
3 E1 =

\*30



[4,4'-ビス[5,7-ジ-t-ペンチル-2-ペソソキサゾリル]スチルベン] 40※4 E 2 =

※



7

2, 5-ビス [5, 7-ジ-*t*-ベンチル-2-ベン  
キサゾリル] チオフェン】

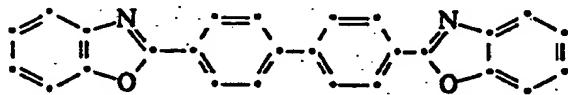
\*5E3=



8

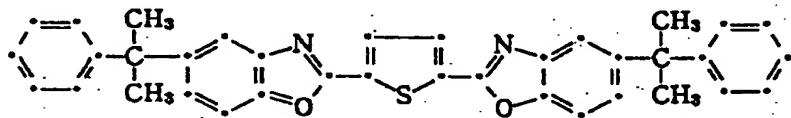
2, 2'-(1, 4-フェレンジビニレン) ビスベン  
チアゾール】

※



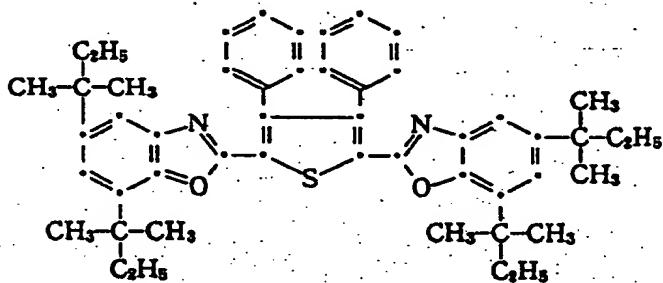
2, 2'-(4, 4'-ビフェニレン) ビスベンゾチ ★7E5=ビス(8-ヒドロキシキノリノ) マグネシウム  
ゾール】

★ 8E6=



2, 5-ビス[5-( $\alpha$ ;  $\alpha$ -ジメチルベンジル)-  
-ベンゾキサゾリル] チオフェン】

★



2, 5-ビス[5, 7-ジ-*t*-ベンチル-2-ベン  
キサゾリル]-3, 4-ジフェニルチオフェン】

ここで用いられる正孔インジェクション層の正孔伝達化  
物は、電場を与えられた2個の電極間に配置されて陽  
から正孔がインジェクトされた場合、正孔を適切に陰  
へ伝達することができる化合物である。好ましい正孔  
伝達化合物は、10<sup>4</sup>~10<sup>5</sup>ボルト/cmの電場を与えら  
れた電極間に層が配置された場合少なくとも10<sup>-8</sup>cm<sup>2</sup>  
ボルト一秒の正孔移動係数をもつ。最も好ましい正孔  
伝達化合物は容易にかつ可逆的に酸化されうる芳香族ア  
ンであることが見出された。

り好ましくは、正孔インジェクション層は本質的に無  
である。これは陽極に隣接した位置にあり、陽極は透  
な電極であることが好ましい。従って正孔伝達化合物  
400nm以上の波長において少なくとも90%透過  
であることが好ましい。

◆本発明に用いられる正孔伝達化合物のあるもの、および  
電子伝達化合物のあるものは、薄膜形成性化合物である  
という付加的な性質をもつことが注目される。ここで用  
いられるようにある化合物がこの物質を電極などの支持  
体上に0.5μm以下の厚さで施した場合に“薄膜形成  
性”である場合、これは実質的にピンホールを含まない  
層を形成する。しかしある化合物が薄膜形成性であると  
いうことは必ずしも0.5μmよりも多量に存在しない  
ということを意味するわけではない。有効帯域の一方の  
層がこの種の薄膜形成性化合物である場合、両層におい  
て結合剤を除くことができるという点でこの薄膜形成性  
は有用である。従って本発明の一実施態様においては、  
発光層および正孔インジェクション帯域の双方が結合剤  
を含有しない。

あるいは他の場合には正孔と電子の発光的再結合を妨げ  
ない結合剤も本発明に有用である。

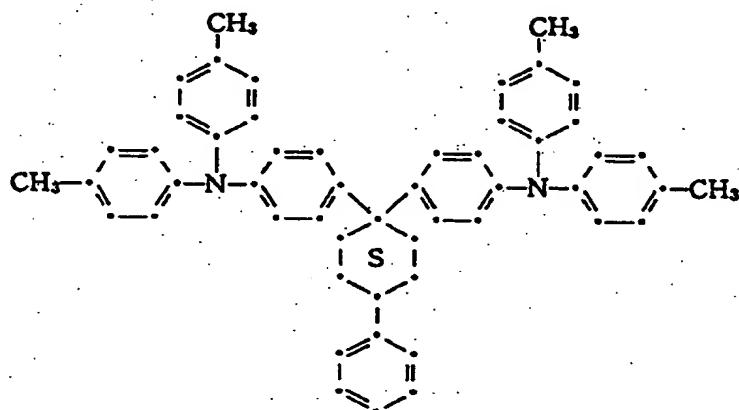
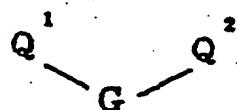
◆50

9

前記のように薄膜を形成しうる化合物の有用な例を以下に示す。特に有用な例には複素環もしくは炭素環、および3個以上の炭素原子を有する脂肪族鎖少なくとも2個を含有するか、あるいは少なくとも2個の基すなわちそれぞれa) 一重結合の囲りに回転しうる基およびb) 少なくとも3個の芳香族もしくは飽和炭素環を含む基を含有する化合物が含まれる。

たとえば薄膜形成性である正孔伝達化合物には次式の構造をもつものが含まれる。

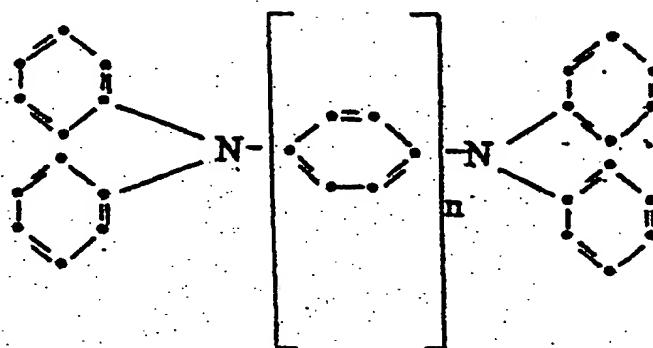
a)



1, 1-ビス(4-ジ-p-トリルアミノフェニル)シクロヘキサン；および次式の構造をもつ化合物

※ii)

※30



(上記式中nは2~4の整数である)、たとえば4, 4-ビス(ジフェニルアミノ)クワドリフェニル。

さらに他の有用な正孔伝達化合物には米国特許第4, 175, 960号明細書13欄13行から14欄42行に列挙されたもの、たとえばビス(4-ジメチルアミノ-2-メチルフェニル)フェニルメタンおよびN, N, N-トリ(p-トリル)アミンが含まれる。

薄膜形成性の電子伝達化合物に関しては、好ましい例には螢光増白剤が含まれる。最も好ましいものは次式の構造をもつ螢光増白剤である。

★50

10

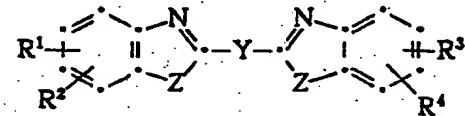
\*上記式中Q¹およびQ²は別個に窒素原子および少なくとも3個の炭素環（それらのうち少なくとも1個は芳香族のもの、たとえばフェニル基である）を含有する基である。炭素環は飽和された環、たとえばシクロヘキシリ基およびシクロヘプチル基であってもよく；Gは連結基、たとえばシクロアルキレン基、たとえばシクロヘキシレン基；アリーレン基たとえばフェニレン基；アルキレン基たとえばメチレン基、エチレン基およびプロピレン基；あるいはC-C結合である。構造a)の範囲内の個々の例には、特に下記のものが含まれる。次式の構造をもつ1, 1-ビス(4-ジ-p-トリルアミノフェニル)-4-フェニルシクロヘキサン；

i)

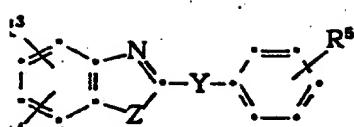
\*

または

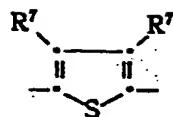
c)



11

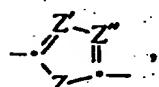


12



これらの式中 R<sup>1</sup>, R<sup>2</sup>, R<sup>3</sup> および R<sup>4</sup> は別個に水素原  
; 1~10 個の炭素原子を有する飽和脂肪族残基、た  
えればプロピル基、t-ブチル基およびヘプチル基；6  
10 個の炭素原子を有するアリール基、たとえばフェ  
ル基およびナフチル基；あるいはハロゲン原子、たと  
えば塩素原子およびフッ素原子であるか；あるいは R<sup>1</sup>  
R<sup>2</sup>、または R<sup>3</sup> と R<sup>4</sup> が一緒になって、1~10 個の  
炭素原子を有する飽和脂肪族残基（たとえばメチル基、  
チル基およびプロピル基）少なくとも 1 個を含んでい  
もよい縮合芳香族環を完成するために必要な原子を構  
し。  
R<sup>5</sup> は 1~20 個の炭素原子を有する飽和脂肪族残基、  
とえばメチル基、エチル基および n-アイコシル基；  
~10 個の炭素原子を有するアリール基、たとえばフ  
ニル基およびナフチル基；カルボキシル基；水素原  
；シアノ基；あるいはハロゲン原子、たとえば塩素原  
およびフッ素原子であり；ただし式 c)において R<sup>3</sup>、  
\* および R<sup>5</sup> のうち少なくとも 2 個は 3~10 個の炭素  
子を有する飽和脂肪族残基、たとえばプロピル基、ブ  
ル基またはヘプチル基であり。

は-O-、-NH- または -S- であり；  
は



たは

10

であり、

m は 0~4 の整数であり；

n は 0, 1, 2 または 3 であり；

R<sup>6</sup> は 6~10 個の炭素原子を有するアリール基、た  
とえばフェニレン基およびナフチレン基であり；R<sup>7</sup> は 水素原子または 6~10 個の炭素原子を有するア  
リール基であり；そして

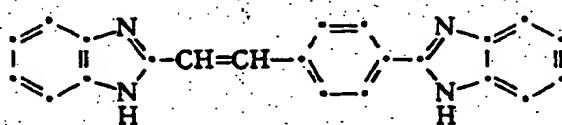
Z' および Z'' は 別個に N または CH である。

上記の脂肪族残基は置換されていてもよい。置換された  
脂肪族残基の場合の置換基には、1~5 個の炭素原子を  
有するアルキル基、たとえばメチル基、エチル基および  
プロピル基；6~10 個の炭素原子を有するアリール  
基、たとえばフェニル基およびナフチル基；ハロゲン原  
子、たとえば塩素原子およびフッ素原子；ニトロ基；な  
らびに 1~5 個の炭素原子を有するアルコキシ基、たと  
えばメトキシ基、エトキシ基およびプロポキシ基が含ま  
れる。

特に好ましい螢光増白剤の例には下記のものが含まれ  
る。2, 5-ビス(5, 7-ジ-t-ペンチル-2-ペ  
ンゾキサゾリル)-1, 3, 4-チアジアゾール；4,  
4'-ビス(5, 7-t-ペンチル-2-ベンゾキサゾ  
リル)スチルベン；2, 5-ビス(5, 7-ジ-t-ペ  
ンチル-2-ベンゾキサゾリル)チオフェン；2, 2'  
-(p-フェニレンジビニレン)-ビスベンゾチアゾ  
ル；4, 4'-ビス(2-ベンゾキサゾリル)ビフェニ  
ル；2, 5-ビス[5-(α, α-ジメチルベンジル)  
-2-ベンゾキサゾリル]チオフェン；4, 4'-ビス  
[5, 7-ジ-(2-メチル-2-ブチル)-2-ベン  
ゾキサゾリル]スチルベン；および 2, 5-ビス[5,  
7-ジ-(2-メチル-2-ブチル)-2-ベンゾキサゾ  
リル]-3, 4-ジフェニルチオフェン。

30

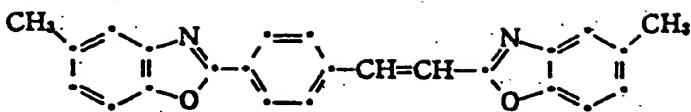
さらに他の有用な螢光増白剤はケミストリー・オブ・シ  
ンセティック・ダイズ、1971、628~637 頁お  
よび 640 頁に列挙されている。すでに薄膜形成性では  
ないものは、一端または両端の環に脂肪族の基を結合さ  
せることによって薄膜形成性にすることができる。この  
種のさらに有用な螢光増白剤には、たとえば下記のもの  
が含まれる。



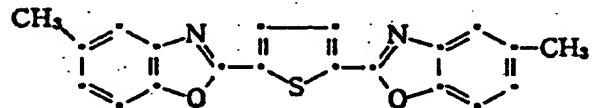
50 (2-(2-(4-(2-ベンゾイミダゾリル)フェニ

13

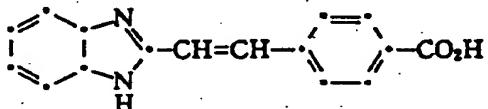
ル] ビニル) ベンゾイミダゾール]



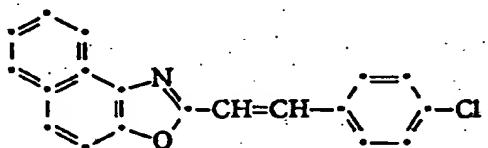
[5-メチル-2-〔2-〔4-(5-メチル-2-ベ  
ンゾキサゾリル) フェニル〕ビニル〕ベンゾキサゾー \*  
ル]



[2, 5-ビス(5-メチル-2-ベンゾキサゾリル)  
チオフェン]



[2-〔2-(4-カルボキシフェニル)ビニル〕ベン  
ゾイミダゾール]  
および



[2-〔2-(4-クロルフェニル)ビニル〕ナフト  
(1, 2-d) オキサゾール]

さらに他の有用な薄膜形成性の電子伝達化合物には8-ヒドロキシキノリンの金属錯体が含まれ、その際金属は好ましくはZn、Al、MgまたはLiである。

有効層の一方が薄膜形成性である場合、容易に認められるようにピンホールのため装置がショートする事はないので、他方は薄膜形成性である必要はない。たとえば有用な装置は、前記の薄膜形成性化合物からなる正孔インジエクション層、および薄膜形成性でない化合物、たとえば1, 1, 4, 4-テトラフェニル-1, 3-ブタジエンからなる発光層を含む。

前記の表Iから明らかなように、有用な陽極電極には商標“ネザトロン”のもとにPPGインダストリーズ社から得られる被覆ガラス陽極が含まれ、有用な陽極電極にはインジウムが含まれる。一般的いかなる陽極および陰極もそれが適切な仕事関数値をもつならば使用できる。たとえば陽極は高い仕事関数をもつべきである。他の有用な陽極の例にはいずれかの半透明な高い仕事関数をもつ

14

\*つ導電性材料、たとえば酸化スズインジウム、酸化スズ、ニッケルまたは金で被覆したガラスが含まれる。好ましくは、この種の陽極は1.0~1000オーム/スクエア (ohms/square) のシート抵抗、および400nm以上の波長に対し80%の光透過率をもつ。このように高い光透過率を少なくとも90%という正孔伝達化合物の透過率と合わせた場合に、本発明に従って作成された装置の特色である卓越した電力転換効率が保証される。他の有用な陰極の例には低い仕事関数をもつ他の金属、たとえば銀、スズ、鉛、マグネシウム、マンガンおよびアルミニウムが含まれる。金属が装置により発生するルミネッセンスに対して高い透過率をもつか否かは関係ない。

第1図は本発明に従って製造されたエレクトロルミネッセント装置を示す。これは酸化スズインジウムの半透明被膜16で被覆されたガラス製支持体14からなる陽極20を含む。この上に正孔インジエクション層18が配置される。発光層20は層18上に配置される。層18および20の一方または双方が薄膜形成性化合物である。陰極22は層20上に配置され、リードワイヤ24が装置を電源26に接続する。電源26を入れると陽極20で発生した正孔は層18と20の界面へ伝達され、ここで陰極22から伝達された電子と結合し、可視光線hνを発する。

電源26が装置10の最大出力点の電圧たとえば15~25ボルトで操作される場合、最大電力転換効率は少なくとも $9 \times 10^{-3} W/W$ である。ある場合にはこの効率が $2 \times 10^{-3}$ に及ぶことが認められた。本発明の装置は改良された電力転換効率の結果1700cd/m<sup>2</sup> (500フィートランペルト) に及ぶ最大輝度を生じることが認められた。

本発明のEL装置は常法により作成される。すなわち正孔インジエクション層、発光層および陰極をそれぞれ溶液被覆法または蒸発により施す。正孔インジエクション層が最初に形成されることが好ましい。発光層に有用な溶剤が正孔インジエクション層に対しても良好な溶剤である場合、発光層を形成するためには蒸発が好ましい。

## 15

ここで用いられる“蒸発”には蒸気相からの沈着のあらる形態が含まれ、真空中で行われるものも含まれる。記の実施例により本発明をさらに説明する。これらの施例において最大輝度は不可逆的破壊を生じる電圧の下の電圧で測定される。若干の実施例において駆動圧について25Vという好ましい限度を超える輝度にする電圧が示されているのはこのためである。

## 実施例1

1回のものと類似したエレクトロルミネッセント装置以下“セル”）を以下により製造した。

1) 電極を作成するため、ネザトロンガラスをまず0.5 μmアルミナの研磨材で数分間研磨した。次いでイソプロピルアルコールおよび蒸留水の1:1(V)混合物で超音波清浄した。次いでこれをイソプロピルアルコールですすぎ、窒素で送風乾燥させた。最後に、使用前これをトルエン中で超音波洗浄し、窒素で送風乾燥させた。

1) 1, 1-ビス(4-ジ-p-トリルアミノフェニル)

シクロヘキサン(HI-1)をネザトロンガラス上一般的な真空蒸着法により沈着させた。すなわち上記質を電気的に加熱されたタンタル製ポートから320の温度で $5 \times 10^{-5}$ トルの系内圧力において蒸発させ、ネザトロンガラスに沈着した生成HI-1フィルム\*

10

20

\*の厚さは75nmであった。

3) 次いで4, 4'-ビス(5, 7-ジ-t-ペニチル-2-ベンゾキサゾリル)スチルベン(E1)を2)に記載したと同じ手法を用いて、ただし供給源温度350°Cを採用してHI-1層の上部に沈着させた。E1層の厚さも75nmであった。

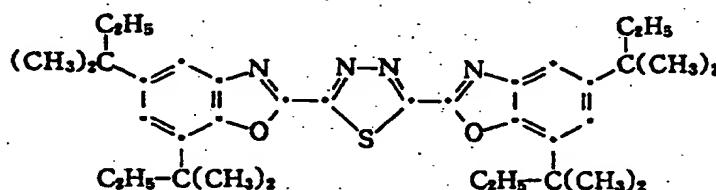
4) 次いでインジウムをE1フィルムの上部にシャドーマスクを介して沈着させた。In電極の面積は0.1cm<sup>2</sup>であり、これもエレクトロルミネッセントセルの有効面積を規定した。

出来上がったセルはセザトロンガラス電極をプラスとしてバイアスをかけた場合、青緑色の光を放出した。放出された光は520nmに最大放出を有していた。達成された最大輝度は与えられた電圧が22Vである場合、電流密度140mA/cm<sup>2</sup>において340cd/m<sup>2</sup>であった。20Vで駆動した場合、最大電力転換効率は $1.4 \times 10^{-3}W/W$ であり、最大エレクトロルミネッセント量子効率は $1.2 \times 10^{-2}$ 光子/電子であった。

## 実施例2

発光層用の他の物質

実施例1と同様にしてエレクトロルミネッセントセルを製造した。ただし下記の螢光増白剤を発光層として用いた。



2, 5-ビス(5, 7-ジ-t-ペニチル-2-ベンゾキサゾリル)-1, 3, 4-チアジアゾール]

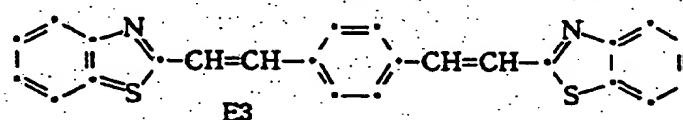
実施例1と同様にしてセルを製造した。ただし螢光増白の蒸発のための供給源温度は260°Cであった。放出された光は橙色であり、590nmに最大放出を有していた。得られた最大輝度は30Vおよび40mA/cm<sup>2</sup>において40cd/m<sup>2</sup>であった。20Vで駆動された場合、最大電力転換効率は $1.5 \times 10^{-3}W/W$ であり、最大EL※

※量子効率は $1.4 \times 10^{-2}$ 光子/電子であった。

## 実施例3

発光層用の他の物質

実施例1と同様にしてエレクトロルミネッセントセルを製造した。ただし2, 2'-(p-フェニレンジビニル)ビスベンゾチアゾール(E3)を発光層として用い、300°Cで蒸発させた。



のセル(ネザトロン/HI-1/E3/In)

緑色の光を放出し、これは560nmに最大放出を有していた。得られた最大輝度は17.5Vおよび200mA/cにおいて340cd/m<sup>2</sup>であった。15Vで駆動した場合、最大電力転換効率は $4 \times 10^{-4}W/W$ であり、最大エレクトロルミネッセント量子効率は $3 \times 10^{-3}$ 光子/★50

★量子であった。

## 実施例4

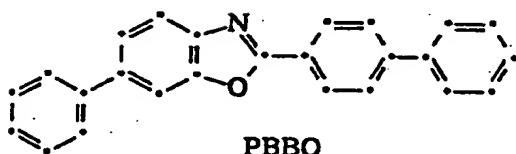
発光層用の他の物質

前記実施例1と同様にしてエレクトロルミネッセントセルを製造した。ただし2-(4-ビフェニル)-6-フェニルベンゾチアゾール(PBBO)を発光層としてE

## 16

17

1の代わりに用い、200°Cで蒸発させた。



このセル（ネザトロン/HI-1/PBBO/In）は  
白青色の光を放出した。得られた輝度は25Vおよび  
50mA/cm<sup>2</sup>において34cd/m<sup>2</sup>であった。20Vで駆動  
した場合、最大電力転換効率は9.5×10<sup>-5</sup>W/Wである\*

18

\*あり、最大エレクトロルミネッセント量子効率は8×10<sup>-4</sup>光子/電子であった。

実施5および6

発光層用の他の物質

実施例1と同様にしてエレクトロルミネッセントセルを  
製造した。ただし発光層はE1の代わりに2,5-ビス  
[5-(α,α-ジメチルベンジル)-2-ベンゾキサゾリル]チオフェン（実施例5）および2,5-ビス  
[5,7-ジ-t-ベンチル-2-ベンゾキサゾリル]-3,4-ジフェニルチオフェン（実施例6）からなり  
り、340°Cの温度で蒸発させた。表IIに結果を示す。

表

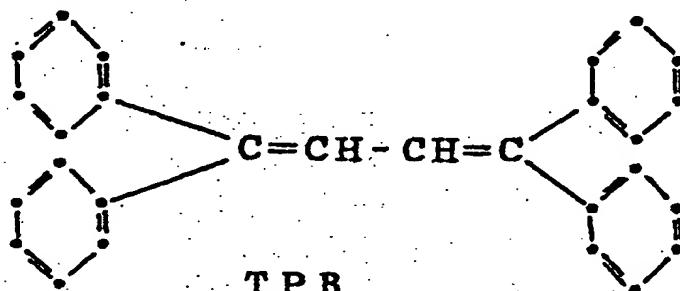
実施例	色	最大放出	最大輝度	II		
				最大電力転換効率	最大EL量子効率	効率測定駆動電力
5	緑	530nm	680cd/m <sup>2</sup> (19Vおよび150mA/cm <sup>2</sup> において)	7×10 <sup>-5</sup> W/W	5×10 <sup>-3</sup> 量子/電子	15V
6	〃	〃	1700cd/m <sup>2</sup> (20Vおよび300mA/cm <sup>2</sup> において)	1.4×10 <sup>-5</sup> W/W	8.4×10 <sup>-3</sup> 量子/電子	14V

## 実施例7

薄膜形成性でない電子伝達化合物

実施例1と同様にしてエレクトロルミネッセントセルを※

※製造した。ただし、1,1,4,4-テトラフェニル-1,3-ブタジエン（TPB）を発光層として用いた。

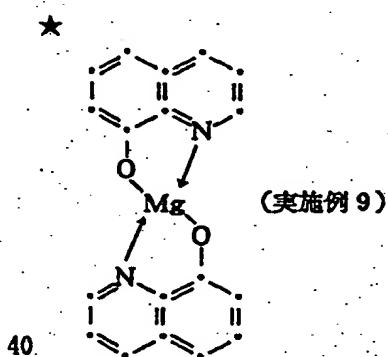


TPB昇華のための供給源温度は210°Cであった。このセルは青色の光を放出し、これは450nmに最大放出を有していた。得られた輝度は20Vおよび200mA/cm<sup>2</sup>において102cd/m<sup>2</sup>であった。15Vで駆動した場合、最大電力転換効率は2×10<sup>-5</sup>W/Wであり、最大エレクトロルミネッセント量子効率は1.2×10<sup>-3</sup>光子/量子であった。このセルは蒸発したTPB層の不均質なかつ薄膜形成性でない性質にもかかわらず機能した。TPB層は顕微鏡下で見た場合小さなクラスターのモザイクの外観を有していた。

## 実施例8および9

電子伝達化合物として8-ヒドロキシノリノの金属錯体を使用

実施例1と同様にしてエレクトロルミネッセントセルを製造した。ただしビス(8-ヒドロキシノリノ)アルミニウム（実施例8）、および次式



40.

の構造をもつビス(8-ヒドロキシノリノ)マグネシウムをそれぞれ発光層として用いた。操作条件は実施例1の記載と同様であった。ただし金属錯体の供給源温度はそれぞれ330°C（実施例8）および410°C（実施例9）であった。表IIIに結果を示す。

19

表

実施例	放出された光の色	最大放出の波長	III		
			最大輝度(cd/m <sup>2</sup> )	最大電力転換効率(V/W)	最大EL量子効率
8	緑	515nm	340 (15Vおよび50mA/cm <sup>2</sup> において)	$8.2 \times 10^{-4}$	$5.8 \times 10^{-3}$ 光子/量子
9	緑	548nm	340 (24Vおよび100mA/cm <sup>2</sup> において)	$1.4 \times 10^{-4}$	$1.5 \times 10^{-3}$ 光子/量子

記各実施例に示した効率を便宜のため第2図にプロットした。第2図の点線は傾向を示すにすぎず、いずれか一方による最適なものを表わすものではない。そこに示されたデータは関係式

$$(\text{電力転換効率}) = \log(\text{EL量子効率}) + \log K$$

上記式中Kは切片(intercept)であり、駆動電圧によって一部制御される係数である)に従うとほぼ直線状である。駆動電圧(第1図の電源26)の値が上がるのをみて、第2図の曲線は下方へ移動する。従ってより駆動電圧では、同一のEL電子効率でも、もはや希する  $9 \times 10^{-5} \text{W}/\text{W}$  の電力転換効率を与えないようである。

【前面の簡単な説明】

20

III

実施例	放出された光の色	最大放出の波長	III		
			最大輝度(cd/m <sup>2</sup> )	最大電力転換効率(V/W)	最大EL量子効率
8	緑	515nm	340 (15Vおよび50mA/cm <sup>2</sup> において)	$8.2 \times 10^{-4}$	$5.8 \times 10^{-3}$ 光子/量子
9	緑	548nm	340 (24Vおよび100mA/cm <sup>2</sup> において)	$1.4 \times 10^{-4}$	$1.5 \times 10^{-3}$ 光子/量子

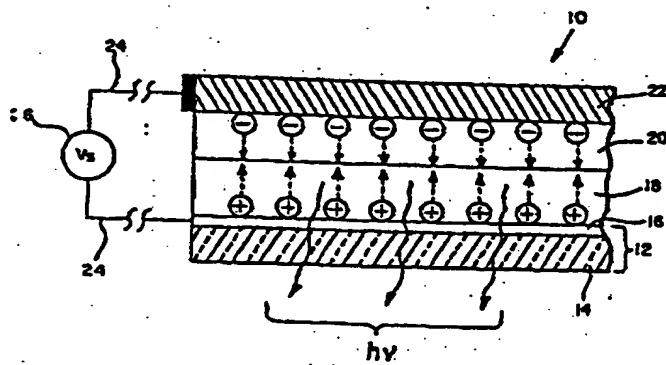
第1図は電源に接続した本発明装置の一部の概略的断面図であり。

第2図は本発明装置に関する電力転換効率対エレクトロルミネッセンス量子効率を示す対数一対数グラフである。

図中の各記号は下記のものを表わす。

- 10 : エレクトロルミネッセンス装置；
- 12 : 陽極； 14 : ガラス製支持体；
- 16 : 半透明被膜；
- 18 : 正孔インジェクション層； 20 : 発光層；
- 22 : 陰極； 24 : リードワイヤ；
- 26 : 電源。

【第1図】



[第2図]

